

つしよに働かなければならなかつたからだ。このことを通じて、いくら無知で頑固なユダヤ人入植者であつても、パレスチナがアラブ人の国であることを感じ取らざるを得なかつた。

英国統治時代のパレスチナ・ユダヤ人社会「イシュューヴ」の指導者で建国後初代首相となつたダヴィド・ベン・グリオンは、パレスチナ人農民と労働者を「バイト・ミフーシユ」(苦痛の感染温床)と表現した。入植者たちはパレスチナ人を「よそ者」とか「外国人」と呼んだ。「我々にとつてこの人間はロシアやポーランドの農民よりも親しみが持てない連中だ」と一人の入植者が書き、「あの連中とは何一つ共通点がない」と別の入植者が書いている。彼らは、パレスチナは無人の地だと教えられて移住してきたのだから、そもそもそこに人が住んでいることに驚いた。「ハデラ」「一八八二年に建設された初期シオニスト・コロニー」にアラブ人が住んでいる家屋があるのを発見して嫌気がさした」と書いた手紙や、リシヨン・レシオン(一八八二年に作られたコロニー)をアラブ人の男や女や子どもが平然と通るのを見て愕然とした、と故郷ポーランドへ書き送つた手紙もある。

無人の地ではなく、先住民を凌駕する必要があつたので、神を味方につける——たとえ無神論者であつても——のが得策であつた。ダヴィド・ベン・グリオンと彼の親友で同僚のイツハク・ベン・ハツヴィイ(ベン・グリオンといつしよにパレスチナで社会主義(労働)シオニズムを指導、後に第二代イスラエル大統領になつた)も、聖書にある神の約束をパレスチナ植民地化の正当化に使つ

た。二人の後を継いだ労働党イデオログたちも一九七〇年代中葉までその手法を続け、さらに最近のリクード党やその分派の世俗主義者も底の浅い聖書主義を振り回して同じことをしている。

聖書解釈でシオニズムを正当化する手法によつて、社会主義シオニストは連帯・平等という社会主義の普遍的価値観とパレスチナ人を駆逐する植民地主義事業とを調和させたのである。本来なら、シオニズムの目的が植民地主義なので、社会主義シオニズムの社会主義とはいつたいどんな社会主義かと問われるべきであつた。どうやら、彼らの集团的記憶では、キブツで具現化された平等な集団生活がシオニズム黄金時代と結び付いているようである。このキブツの生活様式はイスラエル建国後も長く存続し、世界の理想に燃える青年たちを惹きつけた。青年たちはキブツで純粹な共産主義を体験しようとするボランテニア(訳註)に参加した。しかし、ほとんどのキブツがパレスチナ人村を破壊して建てられたこと、村人が一九四八年に民族浄化された事実を知つたうえでキブツへ入つた者、あるいはそれを知り得る立場にあつた者は、ほとんどいなかった。シオニストは、聖書によればパレスチナ人村はもともと古代ユダヤ民族の村であつたので、それを収用するのは奪取とか占領ではなく、解放であると弁明した。「聖書考古学者」特別委員会が民族浄化後のパレスチナ村へ入り、そこが聖書時代にどういふ名前前で呼ばれていたかを「研究」して決定し、それからユダヤ民族基金の幹部がその名前の入植地建設に着手す

るのだ。<sup>17)</sup>一九六七年戦争の後、当時の労働大臣で世俗的社会主义シオニストのイーガル・アロンが同じ方法、つまり聖書によれば古代ユダヤ人のものだったという理屈で、ヘブロン近くにニュータウンを建設した。

そういうことを批判するイスラエル人学者もいた。とりわけゲルシオン・シャフィールやゼエブ・シユテルンヘル（及び米国のザカリ・ロックマン）は、パレスチナの植民地主義的奪取が社会主義シオニズムのいわゆる黄金期を汚辱したと論じた。この歴史研究者たちが説明したように、シオニズムの社会主義は、実践としても生活様式としても、常に普遍主義的社会主义イデオロギーの条件付き限定モデルにすぎなかった。西洋左翼の様々な思想運動を特徴付けていた普遍主義的価値観と大志は、パレスチナでは早くから民族主義化・国家主義化され、シオニズム化されてしまった。だから次世代の入植者にとって社会主義シオニズムが魅力を失ったのは不思議なことではない。<sup>18)</sup>

パレスチナ人から土地を奪った後でも宗教はシオニズム事業の重要な要素として機能した。帝国主義の臨終期の領土争いで、他国を押し退けてパレスチナにおけるユダヤ民族の権利を主張するうえで、宗教が大きな役割を果たすからだ。この民族的権利は先住民パレスチナ人の民族的権利を完全に無視するものだった。二十世紀で最も世俗的で社会主義的な入植事業が、神の約束という宗教的解釈を使い、最も排他的な独占権を主張するものだったのである。聖書依

存はシオニスト入植者にとって非常に役立ち、パレスチナ先住民にとって大きな犠牲を強いるものであった。優れた研究者であったマイケル・ブライアー（一九四二～二〇〇四年）の最後の作品『聖書と植民地主義』（*The Bible and Colonialism*）には、パレスチナの植民地化と同じような手法が世界の各地で使われてきたことが書かれている。<sup>19)</sup>

一九六七年にイスラエルが西岸地区とガザ回廊を占領してからも、同じように聖書を用いた入植地作りが続いた。聖書に登場しているという口実でヘブロンに住民から土地を奪ってニュータウンを建設したイーガル・アロンのことはすでに述べた。キルヤット・アルバと名づけられたその入植地はたちまち狂信的入植者の巣となった。彼らはアロン以上に頻繁に聖書を利用して乱暴狼藉に及んだ。都合のよい章や語句を聖書から引つ張り出して、強盗まがいのことをやるのだ。占領が長く続くのに比例してこの残虐行為はエスカレートしていった。乱暴狼藉行為を聖書に依拠した政治的合法行為として正当化するやり方はますます狂信主義を招き、恐ろしい結果を生みだす。たとえば、聖書には皆殺しの記述がある。ヨシュアによってアマレク人が皆殺しにされる箇所だ。幸いそれをパレスチナ人に対して実行しそうな狂信者は今のところ少数ではあるが、彼らはパレスチナ人だけではなく、自分たちの物差しではユダヤ的とならない人間をもアマレク人と見做す危険な少数者である。<sup>20)</sup>

ユダヤ教のハグダー・シエル・ペサハ（エジプト脱出を記念する過越祭で読まれる詩篇やお祈

sapientia 55  
サピエンティア

Ten Myths About Israel

# イスラエルに関する 十の神話

Ilan Pappé

イラン・パペ [著]

脇浜義明 [訳]



法政大学出版局